
告白 -アフターストーリー-

検体番号10032

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白 - アフターストーリー -

【Nコード】

N1883R

【作者名】

検体番号10032

【あらすじ】

注意：この短編は前作『告白』のアフターストーリーとなっていますので、未読の方はそちらから読んでください。よろしくお願いします。

「へえ、そんな感じだったんだ」

時刻は夕方、壁にかけた時計から18時を知らせる鐘が鳴る。
冬へと移行していくこの季節は、夜の肌寒さが目立ちだす。高校生になって二度目の文化祭も近くなり、学校では準備に精が出ている。

「そうなの！ パパったら意地悪言って……」

そんなある日の夕食前のひと時。私、山城未卯やましろ みつはリビングでお母さんの話を聞いていた。

その内容は、お父さんとの馴れ初め。お父さんとお母さんは高校時代から付き合い始めたらしいので、少し、興味がわいた。昔のことを話すお母さんは、30代後半という年齢を感じさせないほど若々しかった。

「でも、そんなところも好きなんだけどね」

「……はいはい」

前言撤回、“若々しい”ではなく“幼い”。頬に手を当てながら照れるお母さんを見て、私は若干辟易しながら軽く流した。

両親は、世間一般で言うおしどり夫婦だ。私の前でよくいちゃいちゃするし、出勤前のキスも定番になっている。お父さんは少し恥ずかしがっているようだけど、お母さんの頼みは断れないようだ。別に嫌がっている様子もないから、満更でもないみたいだけ。

お父さんは現在出勤中。一般的な株式会社で課長をやっている身なので、帰りは遅いことが多い。

「それにしても、お父さん遅いね」

時間自体は遅くもなんともないのだが、今日は……一応、特別な日だから。

私はもちろん、お父さんにとっても、お母さんにとっても。

「大丈夫よ」

その言葉に振り返ると、何でも分かっているかのようなお母さんの笑顔。その顔の意味が分からず、私はついキョトンとしてしまう。

「何でなのか、分からない？」

私の表情を見透かしてか、そう尋ねられた。

お父さんもそうだけど、人の心を勝手に読むのはやめてほしい。そんなに分かりやすいのかな、私。

「うん、何で？ 遅くなることのほうが多いでしょ？」

「そうね。一応パパもお仕事だし、いろいろあるんでしょうしね」

疑問をそのまま口にすると、あっさり首肯された。

どうということなのか尋ねる前に、お母さんが「でもね……」と続ける。なので、私は素直に次の言葉を待つ。

「でもね……パパ、出勤する前に言ったでしょう？ “絶対に19時までには帰る”って」

「それは、そうだけど……」

確かに言っていた。「だるい」とか「めんどくさい」が口癖のお父さんが「絶対に」なんて言ったから、驚いた記憶がある。でも、言うことなら誰でもできると思っただけど……。

「ふふ、未卯は信じられない？ パパの事」

「いや、信じる信じないじゃなくて……その……」

私が口ごもると、お母さんはただ「大丈夫」と言った。

「パパは……ゆーじは、言った事は曲げないよ。それこそ、絶対に」

そう言ったお母さんの顔は眩しくて、綺麗だった。
同時に、玄関のドアが開く音がした。

お父さんが帰ってきてから数分後、私たちは食卓にいた。お父さんも部屋着に着替え、席に着いている。

四人がけの机にはお父さんとお母さんが隣り合って座り、私がその正面に座る。テーブルの上にはご馳走が並べられており、私の好きなから揚げやポテトサラダもある。きつとお母さんがわざわざ用意してくれたのだろう。

「さて、それじゃあ奏、始めようか」

お父さんが不意に切り出す。料理に目移りしていた私は視線を上げ、二人のほうを見る。

「うん、せーの……」

お母さんも笑顔で返し、二人一緒に私のほうを向く。
そして……

「「未卵、誕生日おめでとう!」」

二つのクラッカー音に、部屋が包まれた。

「ありがとう。お父さん、お母さん」

そう、今日は私の誕生日。17歳になった私としてはクラッカーはやめてほしかったけど、二人の幸せそうな顔を見ると、別にいいかと思えてくる。別に嫌という訳ではないのだから。

「未卯も今年で17か」

「うん」

「17かあ……早いわねえ」

「そうだな」

二人はそう言って、目を閉じた。昔を懐かしんでいるのだろうか。でも二人とも、ごめんなさい。そろそろおながが限界です。

「む。奏、そろそろ食べよう。腹が減った」

そんな私の真意を知ってか知らずか、お父さんがそう言った。私は心の中でこっそりとお礼を言う。

「あ、そうね。それじゃあ……」

「ああ、ほら未卯も」

「あ、うん」

私たちは手を合わせる。

そして、食事に対して感謝を込めて。

「いただきます」

「ふう……」

時間は過ぎて、現在22時。私はソファの上で本を読んでいた。

楽しい食事はあつという間に終わり、たくさんあつた夕食はすべて無くなった。その後、お父さんが買ってきたケーキを食べた。ホールケーキを切り終えた際に、お母さんが「あ、ロウソク！」とか言って直径2cmのロウソクを持ってきたりしたけど、一応無事に誕生会は終わった。

その当の本人は、寝室で熟睡中。家にあつた赤ワインを飲み、寝てしまったのだ。お父さんが苦笑しながら、お母さんを部屋へと背負っていった。

その時、リビングのドアが開く音がした。見ると、お父さんだつた。

「お母さんは？」

「ああ、大丈夫だよ。ぐっすり寝てる」

お母さんはお酒に弱い。それこそ、お猪口いっぱい酔いつぶれてしまうほどだ。それなのにお母さんはお酒が好きで、事あるごとに飲もうとする。それではさすがにまずいので、私とお父さんで説得して家以外では飲まないように言った。本当は禁止しようとしていたのだが、家でならお父さんが対処できるからと言う事で解決した。

そこでふと、私はお父さんに聞きたいことがあった。

「ねえ、お父さん」

本を置いてお父さんのほつを見ると、手帳を開いていた。明日の予定確認をするようだ。

「ん、何だ？」

お父さんは顔だけこちらに向ける。

「今日は、良かったの？」

「何が？」

「何がって……お祝い」

「今日は、二人が付き合いだした日でしょ？」

「……奏から聞いたのか」

お父さんは軽いため息をつき、そう呟いた。

何の因果か今日、つまり私が生まれる約20年前のこの日。私のお母さんがお父さんに、山城奏が山城優司に告白した。それから付き合い始めて、現在に至る。

これは確かに、お父さんが帰る前にお母さんから聞いた話だ。

「お父さん、お祝いするつもりだったんでしょ？」

「……まあな」

私の位置からうつすらと見えるお父さんの手帳には、今日の日付に花丸がしてあった。それも、二つ。それがどういう意味なのか、さすがの私でも理解できる。

今日はお父さんにとって、二つの意味で大切な日だったのだ。

「とはいえ、奏がああなることは予想できたさ。また明日にでも、お祝いするよ」

そう言ったお父さんの笑顔も輝いていて、幸せそうだった。いや、

実際のところ幸せなのだろう。二人を見ていると、心底そう思う。

私は、どうなのだろう

「なあ、未卯」

突然、お父さんに話しかけられた。
顔をそちらに向けると、お父さんはこちらを見てはいなかった。
再び手帳に視線を落とし、確認作業を始めていた。リビングは静かで、時折聞こえるペンの音以外は全くの無音だった。

「何？」

「好きな人はいるのか？」

お父さんは、いつもと変わらない調子でそう言った。詮索するようにはというよりは、本当になんとなく、といった具合に。

「……さあ、どうだろうね」

「そうか」

私ではぐらかすと、案の定詮索してこなかった。本当に興味本位だったのだろう。

「もしいたら、どうするの？」

私も、興味本位で聞いてみた。

「別に」

お父さんもまた、淡泊な答えを返してきた。こういつのを似たものの親子と言っのだろうか。そんなことを考えていると、お父さんが「ただ……」と続ける。私は再びお父さんの方に顔を向ける。

「ただ……いるんなら、頑張れよ」

お父さんの表情は変わらなかった。一切こちらも見えていなかった。ただ、私は驚いていた。

「頑張れって……どういう、意味？」

「そのままの意味だ」

お父さんは私の問いに対して、あくまで淡泊に返す。

「俺が今から言っのは経験論だ。聞き流したければ聞き流せ」

そう前置きをおくと深く息を吸い、吐く。
そして語りだす。お父さんの、山城優司の恋愛観を。

「“好き”という感情は、持っていても仕方ない。あの人のことが好き。そう想い続けることで相手に伝わるんなら、告白なんて大層なイベントは必要ないからな。大切なのは、その“好き”って想いをどうやって相手に伝えるかだ。世間一般ではラブレターとかが定石なんて思われてるが、俺はそうは思わない。要は、当人が一番想いを伝えられる方法をとるべきだって事だ」

私はいつの間にか、お父さんの話に聞き入っていた。ソファから起き上がり、体制が前のめりになっていることに気づく。

でも今はそんなことよりも、お父さんの話が聞きたかった。

「奏は、ただまっすぐに自分の気持ちを伝えてきた。当時の俺は捻くれてたから適当にあしらってしまっただけ、奏の気持ちはものすごく伝わってきた。だから、奏のたった行動は正解だったんだろう」

お父さんはそこで一息間を入れる。そして私の方を向いて、再び話し始めた。

「みんながみんなそうしろとは言わない。俺が言いたいのは、どうすれば自分の想いをより上手く伝えられるかってことだ。奏には奏の方法、未卯には未卯の方法があると思う。だから、もし告白しようと考えてるんなら、もう一度その辺を考えてみてくれ」

言い終えると、お父さんは再び手帳に視線を向ける。

「まあ、あくまで仮定の話だけだな」

その時のお父さんの言葉は、今まで聞いたどの言葉よりも白々しかった。

「はあ……」

現在、私は自分の部屋にいた。
考えるのは、さっきのお父さんの言葉。

「私には私の告白、か……」

私の右手には今、ラブレターがある。それは私が3日かけてやっと完成したもので、便箋いっぱいに書かれた超大作だ。明日の朝にでも下駄箱の中に入れておこうと思っていた。

「……」

でもさっきの話を聞いて、躊躇いが生じた。

私は、彼のが好きだ

その気持ちに偽りはない

でも、でも……

このやり方は、自分らしい？

「……うん、そうだね。そうだよね」

そう思ってから私の行動は早かった。

私は、ラブレターをビリビリに引き裂いて、ゴミ箱に捨てた。

あれだけ時間をかけたのに、名残惜しくはなかった。

「そうだよね。こんなの、私らしくないもんね」

他の誰もでない自分に言い聞かせながら、私は机についた。そして再び便箋を取り出して、手紙を書く。

さっきみたいな長文とは違い、今回は一文だけ。それも、簡単に。

『放課後、屋上で待ってます』

2 - A 山城未卯』

直接伝える。

お母さんがそうだったように。私の気持ちを、想いを、直接伝える。

お母さんにできたんだ、娘の私ができない道理はない。

「想うのは誰でもできる、大切なのは伝えること……」

お父さんの言葉を思い出して、反芻する。うまく伝えられるかと

か、緊張したりしないかとか考えてしまうけど、不思議と不安はなかった。一つの事実が、私の背中を後押ししてくれる。怖くはない。

「私にだって、できるよね」

だって、私は……

「私は、お父さんとお母さんの娘なんだから」

20年近く前にお母さんが見ていた景色が、私にも今、見えた気がした。

(後書き)

どうも、検体番号10032です。

この度はご一読いただき、ありがとうございます。

前作の『告白』からのその後という形で書きましたが、いかがでしたでしょうか？

感想・ご意見お待ちしております。修正点やおかしなところがあれば、遠慮せずに教えてください。参考になりますので。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1883r/>

告白 -アフターストーリー-

2011年10月7日03時44分発行